

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東大第1期卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、京二庫県尼崎市で在宅医療を開設。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

YouとI Love You
は添えておくよ

「親父が天国へ旅立った。最近は何となく悪くなっているから、どこかで覚悟はしていたけれど、同時に奇跡が起きることも願っていた。でもそれは叶わなかった。今思えば、きっと親父なりに、ベストなタイミングでの旅立ちだったんだろう。（中略）親父は映画を教えてくれた。ジャズを教えてくれた。ルールに縛られないこと、好きなものは好きでいいこと、自分がこうだと思ったら貫くことを教えてくれた。お陰で俺は幸せな人間だ。だから明るくサヨナラをしたい。それが和田家流だ。でも魂は死なないし、心にその人がいる限り、どのみちサヨナラなんてない。肉体的なしばしの別れに過ぎないから、「おとう、またな」とくらいにしておこう。でもThank

イラストレーター 和田誠



これはイラストレーターの和田誠さんの息子で、ロックバンド、トライセプトの和嶋さんがツイッターに書いた追悼文です。少々長いのですが、素敵な文章なのでこれ以上削れませんでした。

「週刊文春」の表紙などで知られる和田誠さんが、10月7日に亡くなりました。死因は肺炎。83歳での旅立ちでした。1年前から体調を崩して自宅にて療養、7月から入院していたそうです。日本人男性の平均寿命は81歳（女性は87歳）と考えれば、老化からの自然な経過だったと想像します。そして唱さんの追悼を読めば、過剰な延命治療をせず、穏やかな旅立ちだったことも伺えます。

私は、親の平穏死を邪魔するのは遠くの長男・長女だと書いてよく怒られます。でも実際、とことん延命してくれ！と懇願する子供のなんと多いことか。日本は、本人の最期の希望よりも家族のエゴが優先される変な国です。だから、唱さんの言葉を、これから親を見送るすべての子供さんに読んでほしいと思います。妻で料理研究家の平野レミさんも、こんなコメントを発表しています。

「肺炎を患ってからはご飯を食べられなかったの、和田さんが好きなご飯をたくさん作って、安らかな顔の横に置いてあげました。最後の料理を作っている時はすごく幸せで、『私にとっての一番の幸せは、和田さんにご飯を作ることだったんだ』とあらためて気付きました。」

「在宅医という仕事柄、百人百様の家族を見てきました。幸せな家族とは？と問われたら、「一緒に食うメシを、うまいと思える関係」と答えるでしょう。財産とか家柄など、幸福とは何ら関係もないと、患者さんから学んだ30年です。家族との美味しくて幸せな食卓があったから、和田誠さんのイラストからはいつも、温かみが伝わってきたんですね。」

家族との美味しくて幸せな食卓